

小中高校生の規範意識調査報告書  
—東京都8地区別・小中高校生別分析—

平成28年度

東京都青少年・治安対策本部

# 目 次

## 第 I 部 調査概要

|   |    |
|---|----|
| 第 1 章 調査企画・実施の概要                              | 2  |
| 1. 調査目的                                       | 2  |
| 2. 調査企画の基本                                    | 2  |
| 3. 調査設計                                       | 3  |
| 4. 調査対象                                       | 3  |
| 5. 回収結果                                       | 3  |
| 6. 調査大項目                                      | 4  |
| 7. 調査監修・分析執筆者一覧                               | 4  |
| 第 2 章 調査対象者の基本属性（標本構成）                        | 5  |
| 1. 8 地区別小中高校生                                 | 5  |
| 2. 8 地区別男子・女子                                 | 6  |
| 3. 8 地区別小中高校生別男子・女子                           | 7  |
| 4. 8 地区別地元居住者・地元以外居住者数                        | 8  |
| 5. 8 地区別居住歴                                   | 9  |
| 第 3 章 調査結果の概要                                 | 10 |
| 1. 第 4 章の「挨拶・言葉づかい」まとめ（要旨）                    | 10 |
| 2. 第 5 章の「我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやり（意識次元）」のまとめ（要旨） | 11 |
| 3. 第 6 章の「我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやり（行動次元）」のまとめ（要旨） | 11 |
| 4. 第 7 章の「ルール・マナー違反、問題行動」のまとめ（要旨）             | 11 |
| 5. 第 8 章の「ルール・マナーと地域、大人」のまとめ（要旨）              | 12 |
| 6. 総括   | 13 |

## 第 I 部 調査概要

## 第1章 調査企画・実施の概要

### 1. 調査目的

東京都では、2020年にオリンピック・パラリンピックの開催を控え、「誰もが安全安心を実感できる社会」の実現に向けて取り組んでおり、青少年・治安対策本部は、これにふさわしい安全安心の実現を目指している。そのような中、東京を都民が安心して生活し、来訪者も含めて世界一安全だと実感できるような都市とするため、都民の主観的な意識や地域の特色・違い等を踏まえた上で、きめ細かな対応をしていくことにしている。

そこでまずは、都内の青少年の規範意識を把握することで、青少年の規範意識の育成に資する取組を検討する目的をもって、この調査に臨んだ。

そのために、具体的には、第一に、東京都内の小学生・中学生・高校生（以下「小中高校生」という。）がどのような規範意識を持っているのか、第二に、東京都内の各地域で小中高校生の間になどどのような規範意識の相違があるのか、そして第三に、小中高校生の中に、また男子・女子の間にどのような規範意識の相違があるのかを把握することとした。

こうした把握は、よりきめ細かな、地域の小中高校生に対しての科学的根拠に基づいた政策(evidence-based policy)に資する。

こうした観点から、今回の調査を行うことにした。

### 2. 調査企画の基本

東京都全体での考察とともに、地区別の考察も行う。これより、都全体の政策のみならず、地区別のきめ細やかな政策の企画に資するデータが得られることを期待する。

また、今後、経年調査が企画されたときでも、それに十分対応し得るよう、同じ方法にて、同じサンプリングにて、同じ調査項目にて調査することが可能となるような調査設計とした。

さらに、サンプリングにおいてもサンプル数においても科学性を担保しえるレベルでの調査設計とした。

具体的な調査設計としては、地域と小中高校生の2つの基本設定を行った。

第一に、地理的なバランス及び地域の社会的文化的状況を考慮し、東京都内の区部5か所、市部3か所の合計8か所を調査対象として選定した。

第二に、その中で協力を得られた小学校32校、中学校22校、高等学校8校の合計62校を選定した。

第三に、小学生は5年生、中学生は2年生、高等生は2年生を対象とした。

総計7,754人に調査票を送付し、学校ごとに調査票を回収した。

今までひとくくりに「規範意識」としていたものを、「挨拶・言葉づかい」「我慢・克己心・自己管理」「敬う心・思いやり」の3つの領域に分け、それに「ルール・マナー違反、問題行動」を付け加えて調査することにした。

また、これら4つの領域を「意識次元」と「行動次元」に分けて調査することにした。

こうして4領域・2次元が小中高校生ではどのように異なるのか、男子・女子ではどのように異なるのか、8つの地区ではどのように異なるのかを析出する。

### 3. 調査設計

- (1) 母集団 : 東京都の小学校 5 年生・中学校 2 年生・高等学校 2 年生の児童生徒
- (2) 調査地域 : 地域種別ごとの 8 地域
- (3) 標本数 : 小学生 2,780 人、中学生 2,986 人、高校生 1,988 人の合計 7,754 人
- (4) 抽出方法 : 事前に協力を得られた小学校 32 校、中学校 22 校、高等学校 8 校
- (5) 調査方法 : 集合調査法

今回のアンケートに協力を得られた学校に調査票を郵送し、集合調査法にて各クラスで調査実施した。その際、児童生徒の書き込んだ調査票は本人が封筒に入れ、封をして、その後担当教員が回収した。回収された調査票は開封されることなく、委託会社へ返送された。

- (6) 調査期間 : 平成 28 年 7 月 5 日 (火) ~ 7 月 29 日 (金)
- (7) 調査機関 : 株式会社エントリーサポート

### 4. 調査対象

地域ごとの特徴を調査するために、以下の 8 つの地域に分類した。

| 地域名  | 地域の特色           | 対象校  | 対象人数    |
|------|-----------------|------|---------|
| A 地区 | 大規模な繁華街を有する地域   | 10 校 | 675 人   |
| B 地区 | 山の手の住宅街を有する地域   | 9 校  | 1,091 人 |
| C 地区 | 臨海部の新興住宅街を有する地域 | 7 校  | 988 人   |
| D 地区 | 下町の住宅街を有する地域    | 7 校  | 1,196 人 |
| E 地区 | 治安改善運動を推進している地域 | 7 校  | 1,050 人 |
| F 地区 | 市部の住宅街を有する地域    | 9 校  | 950 人   |
| G 地区 | 市部の繁華街を有する地域    | 6 校  | 920 人   |
| H 地区 | 豊かな自然を有する地域     | 7 校  | 884 人   |

### 5. 回収結果

- (1) 配票数 : 7,754 票
- (2) 回収数 (有効回収数) : 6,768 票
- (3) 回収率 : 87.3%

## 6. 調査大項目

- ・調査対象者属性（フェイスシート）
- ・規範①挨拶・言葉づかい（意識次元、行動次元）
- ・規範②我慢・克己心・自己管理（意識次元、行動次元）
- ・規範③敬う心・思いやり（意識次元、行動次元）
- ・ルール・マナー、問題行動（意識次元、行動次元）
- ・地域活動
- ・ルール・マナーの社会化等

以上の大項目を設定し、調査票を作成した。

## 7. 調査監修・分析執筆者一覧

|       |         |                                      |
|-------|---------|--------------------------------------|
| 矢島 正見 | （代表監修者） | 中央大学文学部教授（第1章、第2章、第3章6、第9章）          |
| 永房 典之 | （監修者）   | 淑徳大学短期大学部教授（第3章2・3・5、第5章、第6章、第8章1・6） |
| 金子 泰之 | （監修者）   | 常葉大学短期大学部講師（第3章1・4、第4章、第7章、第8章2～5）   |

## 第2章 調査対象者の基本属性(標本構成)

### 1. 8 地区別小中高校生

回答者を小中高校生別で見ると、小学生が全体の34.5%、中学生が37.8%、高校生が27.7%となっている。

各地区で小学生と中学生に比率の違いが見られるので、小学生と中学生を含めての地区分析では偏りが生じる危険性はあるが、小学生と中学生を別々に地域分析する分には問題ない。

高校生については、地区によっては、あまりにもサンプル数が少ないので、地区分析に耐えられない。よって、地区分析は高校生を除いての分析となる。

|     |     | 合計            | 小中高校生別       |              |              |    |
|-----|-----|---------------|--------------|--------------|--------------|----|
|     |     |               | 小学生          | 中学生          | 高校生          | 不明 |
| 全体  |     | 6768<br>100.0 | 2335<br>34.5 | 2559<br>37.8 | 1874<br>27.7 | 0  |
| 地区別 | A地区 | 398<br>100.0  | 172<br>43.2  | 208<br>52.3  | 18<br>4.5    | 0  |
|     | B地区 | 810<br>100.0  | 384<br>47.4  | 397<br>49.0  | 29<br>3.6    | 0  |
|     | C地区 | 494<br>100.0  | 269<br>54.5  | 219<br>44.3  | 6<br>1.2     | 0  |
|     | D地区 | 986<br>100.0  | 387<br>39.2  | 461<br>46.8  | 138<br>14.0  | 0  |
|     | E地区 | 874<br>100.0  | 252<br>28.8  | 358<br>41.0  | 264<br>30.2  | 0  |
|     | F地区 | 534<br>100.0  | 286<br>53.6  | 233<br>43.6  | 15<br>2.8    | 0  |
|     | G地区 | 742<br>100.0  | 203<br>27.4  | 346<br>46.6  | 193<br>26.0  | 0  |
|     | H地区 | 657<br>100.0  | 305<br>46.4  | 268<br>40.8  | 84<br>12.8   | 0  |
|     | その他 | 1228<br>100.0 | 52<br>4.2    | 53<br>4.3    | 1123<br>91.4 | 0  |
|     | 不明  | 45<br>100.0   | 25<br>55.6   | 16<br>35.6   | 4<br>8.9     | 0  |

## 2. 8 地区別男子・女子

男女別では「男子」が 49.1%、「女子」が 50.9%で、ほぼ半々の割合であった。これより、男女比においては、サンプル数は妥当であったと言える。また、男女比に地区での偏りのないことも妥当である。

|     |     | 合計            | 男女別          |              |    |
|-----|-----|---------------|--------------|--------------|----|
|     |     |               | 男子           | 女子           | 不明 |
| 全体  |     | 6674<br>100.0 | 3280<br>49.1 | 3394<br>50.9 | 94 |
| 地区別 | A地区 | 392<br>100.0  | 200<br>51.0  | 192<br>49.0  | 6  |
|     | B地区 | 801<br>100.0  | 420<br>52.4  | 381<br>47.6  | 9  |
|     | C地区 | 488<br>100.0  | 241<br>49.4  | 247<br>50.6  | 6  |
|     | D地区 | 971<br>100.0  | 489<br>50.4  | 482<br>49.6  | 15 |
|     | E地区 | 863<br>100.0  | 430<br>49.8  | 433<br>50.2  | 11 |
|     | F地区 | 521<br>100.0  | 249<br>47.8  | 272<br>52.2  | 13 |
|     | G地区 | 734<br>100.0  | 387<br>52.7  | 347<br>47.3  | 8  |
|     | H地区 | 645<br>100.0  | 299<br>46.4  | 346<br>53.6  | 12 |
|     | その他 | 1219<br>100.0 | 537<br>44.1  | 682<br>55.9  | 9  |
|     | 不明  | 40<br>100.0   | 28<br>70.0   | 12<br>30.0   | 5  |



### 3. 8 地区別小中高校生別男子・女子

小中高校生別に男女の割合をみると、小学生は「男子」が51.5%、「女子」が48.5%、中学生は「男子」が50.7%、「女子」が49.3%でほぼ半々の割合であった。高校生は「男子」が44.1%、「女子」が55.9%で、女子が若干多かった。小学生・中学生は地区別でも男女比に大きな差はみられないが、高校生では地区によっては男女比に大きな違いが見られた。

|     | 小学生          |              |             | 中学生          |              |             | 高校生         |              |             |   |
|-----|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|-------------|---|
|     | 男子           | 女子           | 不明          | 男子           | 女子           | 不明          | 男子          | 女子           | 不明          |   |
| 全体  | 1182<br>51.5 | 1112<br>48.5 | 41          | 1277<br>50.7 | 1241<br>49.3 | 41          | 821<br>44.1 | 1041<br>55.9 | 12          |   |
| 地区別 | A地区          | 100<br>58.1  | 72<br>41.9  | 0            | 99<br>49.0   | 103<br>51.0 | 6           | 1<br>5.6     | 17<br>94.4  | 0 |
|     | B地区          | 200<br>52.9  | 178<br>47.1 | 6            | 207<br>52.5  | 187<br>47.5 | 3           | 13<br>44.8   | 16<br>55.2  | 0 |
|     | C地区          | 132<br>49.3  | 136<br>50.7 | 1            | 105<br>49.1  | 109<br>50.9 | 5           | 4<br>66.7    | 2<br>33.3   | 0 |
|     | D地区          | 194<br>51.3  | 184<br>48.7 | 9            | 236<br>51.6  | 221<br>48.4 | 4           | 59<br>43.4   | 77<br>56.6  | 2 |
|     | E地区          | 122<br>49.0  | 127<br>51.0 | 3            | 181<br>51.7  | 169<br>48.3 | 8           | 127<br>48.1  | 137<br>51.9 | 0 |
|     | F地区          | 132<br>47.7  | 145<br>52.3 | 9            | 111<br>48.5  | 118<br>51.5 | 4           | 6<br>40.0    | 9<br>60.0   | 0 |
|     | G地区          | 117<br>58.5  | 83<br>41.5  | 3            | 176<br>51.2  | 168<br>48.8 | 2           | 94<br>49.5   | 96<br>50.5  | 3 |
|     | H地区          | 139<br>46.6  | 159<br>53.4 | 7            | 124<br>47.1  | 139<br>52.9 | 5           | 36<br>42.9   | 48<br>57.1  | 0 |
|     | その他          | 31<br>59.6   | 21<br>40.4  | 0            | 28<br>54.9   | 23<br>45.1  | 2           | 478<br>42.8  | 638<br>57.2 | 7 |
|     | 不明           | 15<br>68.2   | 7<br>31.8   | 3            | 10<br>71.4   | 4<br>28.6   | 2           | 3<br>75.0    | 1<br>25.0   | 0 |

#### 4. 8 地区別地元居住者・地元以外居住者数

地元居住者・地元以外居住者について、「問 2.あなたが今住んでいるところはどこですか」という問から、学校のある地区と住んでいる地区が同じ場合は「地元居住者」とし、異なる場合は「地元以外居住者」とした。

地元居住の割合は全体の 76.8%であった。逆に 23.2%の児童生徒は学校の地区外から通っていることになる。

|         |     | 合計            | 地元居住者・地元以外居住者 |               |    |
|---------|-----|---------------|---------------|---------------|----|
|         |     |               | 地元居住          | 地元以外<br>居住者   | 不明 |
| 全体      |     | 6723<br>100.0 | 5161<br>76.8  | 1562<br>23.2  | 45 |
| 地区<br>別 | A地区 | 398<br>100.0  | 390<br>98.0   | 8<br>2.0      | 0  |
|         | B地区 | 810<br>100.0  | 808<br>99.8   | 2<br>0.2      | 0  |
|         | C地区 | 494<br>100.0  | 470<br>95.1   | 24<br>4.9     | 0  |
|         | D地区 | 986<br>100.0  | 771<br>78.2   | 215<br>21.8   | 0  |
|         | E地区 | 874<br>100.0  | 819<br>93.7   | 55<br>6.3     | 0  |
|         | F地区 | 534<br>100.0  | 531<br>99.4   | 3<br>0.6      | 0  |
|         | G地区 | 742<br>100.0  | 718<br>96.8   | 24<br>3.2     | 0  |
|         | H地区 | 657<br>100.0  | 654<br>99.5   | 3<br>0.5      | 0  |
|         | その他 | 1228<br>100.0 | 0<br>0.0      | 1228<br>100.0 | 0  |
|         | 不明  | 0<br>0.0      | 0<br>0.0      | 0<br>0.0      | 45 |

## 5. 8 地区別居住歴

居住歴は「生まれたときから」が 50.3%で最も多く、次いで「小学校に入る前から」が 29.9%、「小学校 1～3年生のころから」が 9.3%の順で多かった。

半数の児童生徒は生まれたときからの地域住民であることがわかる。また、8割の児童生徒は学校に通う前からの地域住民であることが分かる。

|     |     | 合計            | 居住歴(いつから住んでいるか) |              |               |               |            |           | 不明 |
|-----|-----|---------------|-----------------|--------------|---------------|---------------|------------|-----------|----|
|     |     |               | 生まれたときから        | 小学校に入る前から    | 小学校1～3年生のころから | 小学校4～6年生のころから | 中学生になってから  | 高校生になってから |    |
| 全体  |     | 6689<br>100.0 | 3363<br>50.3    | 1997<br>29.9 | 623<br>9.3    | 463<br>6.9    | 187<br>2.8 | 56<br>0.8 | 79 |
| 地区別 | A地区 | 394<br>100.0  | 195<br>49.5     | 108<br>27.4  | 31<br>7.9     | 41<br>10.4    | 16<br>4.1  | 3<br>0.8  | 4  |
|     | B地区 | 801<br>100.0  | 297<br>37.1     | 258<br>32.2  | 123<br>15.4   | 95<br>11.9    | 28<br>3.5  | 0<br>0.0  | 9  |
|     | C地区 | 487<br>100.0  | 179<br>36.8     | 191<br>39.2  | 66<br>13.6    | 39<br>8.0     | 12<br>2.5  | 0<br>0.0  | 7  |
|     | D地区 | 977<br>100.0  | 538<br>55.1     | 264<br>27.0  | 87<br>8.9     | 68<br>7.0     | 19<br>1.9  | 1<br>0.1  | 9  |
|     | E地区 | 869<br>100.0  | 531<br>61.1     | 219<br>25.2  | 60<br>6.9     | 29<br>3.3     | 24<br>2.8  | 6<br>0.7  | 5  |
|     | F地区 | 526<br>100.0  | 229<br>43.5     | 176<br>33.5  | 64<br>12.2    | 45<br>8.6     | 11<br>2.1  | 1<br>0.2  | 8  |
|     | G地区 | 734<br>100.0  | 386<br>52.6     | 238<br>32.4  | 55<br>7.5     | 35<br>4.8     | 16<br>2.2  | 4<br>0.5  | 8  |
|     | H地区 | 647<br>100.0  | 370<br>57.2     | 192<br>29.7  | 42<br>6.5     | 29<br>4.5     | 12<br>1.9  | 2<br>0.3  | 10 |
|     | その他 | 1220<br>100.0 | 620<br>50.8     | 344<br>28.2  | 90<br>7.4     | 81<br>6.6     | 46<br>3.8  | 39<br>3.2 | 8  |
|     | 不明  | 34<br>100.0   | 18<br>52.9      | 7<br>20.6    | 5<br>14.7     | 1<br>2.9      | 3<br>8.8   | 0<br>0.0  | 11 |

## 第3章 調査結果の概要

### 1. 第4章「挨拶・言葉づかい」のまとめ（要旨）

規範意識の中の「挨拶・言葉づかい」の「意識次元」と「行動次元」について分析を行った。

#### <男女別小中高校生別の特徴>

他者への挨拶、名前を呼ばれた時の返事、目上の人に対する丁寧な言葉づかい等に関する「意識」については、女子より男子の方が、小中高校生と学年が上がるにつれて、低くなる傾向があった。

「行動」においても同様の傾向が見られ、学年が上がるほど、実行しなくなる傾向があった。

他方、友達にうそをつく、友達に謝らない、友達に感謝の言葉を言わない等、友人関係における規範意識については、概して「意識」が高いが、特に女子は高い傾向にあり、小中高校生の全段階にみられた。同調圧力により互いに統制し合うという状況がみられた。

「行動」においても同様の傾向が見られ、小中高校生全体として、友達にうそをついたり悪口を言ったりする割合は低く、特に女子の中で経験した割合は低かった。

#### <地区別小学生・中学生の特徴>

H地区の中学生において、友達に悪口を言う、友達にうそをつくことに関する「意識」が、他の地区よりやや高い傾向が見られたものの、中学生のみで見られた傾向であり、地区としての特徴とまで言える顕著な結果ではなかった。

#### <その他の特徴>

挨拶・言葉づかいの「意識」と「行動」には、男女別、小中高校生別で類似した次の①及び②の相関関係が見られた。

- ① 挨拶、返事、丁寧な言葉づかいに関する意識が高いほど、挨拶、返事、丁寧な言葉づかいを実行できているという関係
- ② 挨拶、返事、丁寧な言葉づかいに関する意識が高いほど、友人間での悪口やうその行動が減少するという関係

これらの相関関係を言い換えると、友人間で悪口を言ったり、うそをついたりする「行動」が多いほど、挨拶、返事、丁寧な言葉づかいの「意識」が低く「行動」が少ないということである。

### 2. 第5章「我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやり（意識次元）」のまとめ（要旨）

規範意識の中の「我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやり」の「意識次元」について分析を行った。

#### <男女別小中高校生別の特徴>

我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやりの意識については、男子よりも女子の方が全般的に高く、小中高校生別では、「我慢・克己心・自己管理」の意識は小学生が高く、「敬う心・思いやり」の意識は高校生が高かった。「我慢・克己心・自己管理」の意識の高さが学年に比例していない点が課題である。

#### <地区別小学生・中学生の特徴>

小学生で、意識が高い項目が多い地区は、B地区及びG地区であり、他方、意識が低い項目が多い地区は、F地区であった。

中学生で、意識が高い項目が多い地区は、G地区であり、他方、意識が低い項目が多い地区は、C地区であった。

### <その他の特徴>

我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやりの「意識」と「行動」の間には、統計的に有意な相関関係がみられた。

具体的には、我慢・克己心の意識が“低くない”ほど、我慢・克己心が実行できている。

また、自己管理・敬う心・思いやりの意識が高いほど、自己管理・敬う心・思いやりが実行できている。

ただし、自己管理の意識については、自己管理の行動と正の相関関係がみられたものの、数値が低かった。

つまり、本調査の結果から、対象となった青少年の多くが、周りから自分が変な人と思われない、笑われない、地域での悪い噂が流れないように自己管理の意識を持っていることが示されているが、自己管理の行動につながるには、それだけでは不足していることを示唆している。

相関分析結果から、青少年が「自己管理」を実行するようになるには、地域での悪い評判を回避する意識だけでなく、家庭、学校、社会でも、自分本位や狭い仲間ばかりを優先せず、できるだけ他者に配慮する意識を高める必要があるといえる。

青少年が多様な多くの人と相互作用（コミュニケーション）を活発にし、これらの意識を内面化することができるよう、家庭、学校、社会での様々な場面において、周囲の大人が青少年への働きかけを増やすことも、その方法の一つである。

### 3. 第6章「我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやり（行動次元）」のまとめ（要旨）

規範意識の中の「我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやり」の「行動次元」について分析を行った。

#### <男女別小中高校生別の特徴>

我慢・克己心・自己管理・敬う心・思いやりの行動については、男子よりも女子の方が実行できていた。

多くの質問項目で、中学生の行動に低い傾向がみられ、高校生の方が高い項目、他方で小学生の方が高い項目もみられた。今後は、発達や教育の段階の高さと必ずしも比例しない項目への取組みが課題といえる。

#### <地区別小学生・中学生の特徴>

小学生と中学生ともに実行する項目がやや多いのはG地区、小学生で実行する項目がやや多いのはB地区であった。

他方で、小学生で実行しない項目がどちらかといえば多いのはF地区とC地区であった。このF地区とC地区は、中学生においては、実行する項目も実行しない項目も見られた。

### 4. 第7章「ルール・マナー違反、問題行動」のまとめ（要旨）

規範意識の中の「ルール・マナー」の「意識次元」と「行動次元」について分析を行った。

#### <男女別小中高校生別の特徴>

全体として、他者のルール・マナー違反に対しては、「気になる」もしくは「少し気になる」と答えている割合が高く、小中高校生の意識の高さがうかがえた。

ただし、自転車の乗り方やスマートフォン・携帯電話の使い方、授業中のおしゃべりなど軽微なマナー違反に関しては、それを許容する傾向が見られた。

また、女子よりも男子の方が、意識が低い傾向にある。

さらに、学年が上がるほどルール・マナー違反を許容する傾向があり、意識が低下することが明らかとなった。特に、小学生と中学生との差異が大きく、中学生になると意識の低下が大きい。

他方、授業中のおしゃべり、先生の指示に従わない、歩道いっぱいに広がって歩くなど軽微な問題行動を除くと、ルール・マナーに反する行為を経験した割合は低かった。都全体としてみれば、ルール・マナー違反の経験率はそれほど高いとは言えないだろう。

また、学年が上がるほどルール・マナーに反する行為を経験した割合が高くなる傾向が見られたが、“友達を仲間はずれにした”割合については、男子は中学生・高校生よりも小学生において高く、女子は小学生・高校生よりも中学生において高かった。

#### <地区別小学生・中学生の特徴>

小学生ではF地区、中学生ではA地区、C地区、H地区で気になる傾向がみられたものの、他の地区と比較して顕著な差と言えるほどの違いはみられなかったため、地区別の結果は慎重に解釈する必要がある。

また、ルール・マナー違反の内容によって地区の傾向が異なることから、ルール・マナー違反の意識と行動に対して、地域性の要因が強く影響していると断定することは今回の結果だけでは難しいだろう。

#### <その他の特徴>

ルール・マナー違反の意識と行動については、男女別、小中高校生別、すべてにおいて類似した次の①及び②の相関関係が見られた。

① 学校場面での意識が高ければ公共場面の意識は高く、学校場面での意識が高ければ学校場面での逸脱行動も公共場面での逸脱行動も少ない。

② 公共場面での意識が高ければ学校場面での逸脱行動も公共場面での逸脱行動も少ない。

なお、男子より女子の方が、公共場面の規範意識と学校場面の逸脱行動の関連が強い可能性がある。つまり、公共場面の規範意識が低いほど学校場面の逸脱行動が増え、学校場面の逸脱行動が多いほど公共場面の規範意識が低いのが女子と言える。

また、小学生よりも、中学生と高校生は学校内の逸脱行動と公共場面の逸脱行動の関連が強い可能性がある。つまり、学校内での逸脱行動が多ければ、公共場面の逸脱行動が多く、公共場面の逸脱行動が多ければ、学校内での逸脱行動が多いのが中学生・高校生である。

さらに、小学生・中学生と比べると、高校生は学校場面の規範意識と公共場面の逸脱行動の関連がやや弱い可能性がある。つまり、学校場面の規範意識が低くても、公共場面での逸脱行動につながりにくいのが高校生である。

### 5. 第8章の「ルール・マナーと地域、大人」のまとめ（要旨）

規範意識の中の「ルール・マナー」と「地域、大人」について分析を行った。

#### <男女別小中高校生別の特徴>

第一に、地域活動については、小学生・中学生・高校生と学年が上がるほど、現在参加していない傾向があった。

第二に、ルールやマナーを守ることについては、“親”が良い影響や手本となっていた。“友達”の影響も大きく、特に女子においてその傾向が強かった。

他方、“学校の先生”や“祖父母”の影響は、学年が上がるにつれて低下する傾向が見られた。

なお、中学生は、“先輩”を良い影響・手本と捉えている傾向があった。

第三に、ルールやマナーを守る生活に必要なことについては、最も重要なものとして挙げられたのは、“一人一人が自覚すること”であった。

第四に、“大人はルールやマナーを守る人が多い”、“友人はルールやマナーを守る人が多い”、“自分はルールやマナーを守る人間だと思う”を比較してみると、「自分>大人>友人」となっていた。つまり、

小中高校生は、自分自身はルールやマナーを守っている自覚を持っている。また、小学生、中学生、高校生と学年が上がるほど“大人はルールやマナーを守る人が多い”と思わなくなる傾向が分かった。学年が上がるにつれて、青少年は大人のルールやマナー遵守に対する信頼性を低下させていることが伺えた。

第五に、困ったときに相談する相手については、“親”と“友達”を選択した割合が高かった。

#### <地区別小学生・中学生の特徴>

B地区は、大人、友人、自分すべてにおいてルール・マナーを守る比率が高いことが分かった。

また、E地区は、小学生、中学生ともに、困ったときに相談する相手が特に多く、“親”“友達”“学校の先生”を選択した割合が高かった。

## 6. 総括

規範意識全般について、総括を行う。

#### <男女別小中高校生別の総括>

男女別小中高校生別の調査結果から、次のことがいえる。

- 意識においても行動においても、おおむね、女子のほうが男子よりも良好であった。

しかし、こうした傾向は男子の問題性を析出していると断言し得るものではない。ジェンダーの差異として理解することも可能である。

また、女子について、大人に対しての気配りから比べると、友達に対しての気配りが顕著に析出されている。関係性への過剰反応という状況が生まれているとも考えられる。

いずれにせよ、こうした違いを考慮しての細やかな対応が求められる。

- 小学生、中学生、高校生へと成長発達するにつれて、相対的に意識は低下し、行動は問題化してくる。しかし、これだけで、成長に伴い規範の軽視化が進むとは一概に言えない。外在的規範の形式的な内面化から真の内面化に向かっている過程と理解することもできるからである。
- 小学生から中学生への意識の低下及び行動の問題化が顕著である。そして、そうした意識・行動の低位状態は高校生へと継続されているという傾向がみられる。

#### <地区別小学生・中学生別の総括>

地区別小学生・中学生別の調査結果から、地域特有の傾向は見出されなかった。

なお、地区別に、「挨拶・言葉づかい」「敬う心・思いやり」「我慢・克己心・自己管理」「ルール違反・マナー違反・問題行動」のそれぞれの規範領域、あるいは、それぞれの質問項目で、違いは見出されるものの、全体で顕著な差異は見られなかった。

#### <その他の総括>

その他の調査結果から、次のことがいえる。

- 学校場面での規範意識が低ければ学校場面での逸脱行動は増え、公共場面での規範意識が低ければ公共場面での逸脱行動は増えるほか、学校場面での規範意識が低ければ公共場面での規範意識も低く、学校場面での逸脱行動が増えれば公共場面での逸脱行動も増える、という相関関係が見られる。学校という空間と公共という空間が、少なくとも規範意識・行動の次元では繋がっているといえる。
- 親・友達・先生・祖父母・先輩という家庭領域や学校領域の大人が子供に強い影響を与えているといえる。